

高麗版『人天眼目』とその資料

椎名宏雄

一 書誌上の問題
知ることく、わが永平道元は、『正法眼藏』仏道の卷において、晦巖智昭の編する『人天眼目』に対して、痛烈な非難をあびせている。

後来、智聰といふ小兒子ありて、祖師の一⁽¹⁾道兩道をひろひあつめて、五家の宗派といひ、人天眼目となづく。人これをわきまへず、初心晚学のやから、まこととおもひて、衣領にかくしもてるもあり。人天眼目にあらず、人天の眼目をくらますなり、いかでか瞎却正法眼藏の功德あらん。かの人天眼目は、智聰上座、淳熙戊申十二月のころ、天台山万年寺にして編集せり。後来の所作なりとも、道是あらば聽許すべし。これは狂亂なり、愚暗なり、参學眼なし、行脚眼なし、いはんや見仏祖眼あらんや、もあるべからず、愚蒙といふべし。その人をしらず、人にあはざるが、言句をあつめて、その人とある人の言句をひろはず。しりぬ、人をしらずといふことを。

正伝の仏法の立場から、五家七宗や禪宗の呼称を峻拒する仏道の卷が、広く五家の機闇・綱要を集めて編次し類別した『人天眼目』を、かえつて「人天の眼目をくらます」書と批難するのは、むしろ当然であるといえよう。

実は、晦巖が本書を編集した天台山平田万年寺は、道元にとっても、かつて入宋中に訪れて時の住持元薦から嗣書の閲覧を許された、懐しい寺であった。かれが国清寺からなお往復十数キロ余の深山に位置するこの寺に拝登した直接の動機は、おそらく、淳熙一五年(一一八八)に、わが栄西がその三門両廻を再建した寺、という縁故によるものであった。『人天眼目』の成立は、あたかもこの三門再建と同年に当る。いま、われわれは、道元の万年寺に対して抱く懷旧の念を思うにつけても、この五家の綱要書に対する毅然たる態度を、改めて思い知らされるのである。

しかし、筆者はここで道元の仏法を論ずるのが目的ではな

△表1▽ 諸本一覧

〔刊行本〕

No.	刊行年	西暦	卷冊	刊行者	典拠	所蔵者
②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳⑳⑳㉑㉒㉓	洪至元延乾宝淳	一一八八	宋版?	晦巖智昭の自序	物初大觀の重修後序	東洋、天理（二本、一は零本）、両足院、三井旧蔵
大明光康覆元延寛承万嘉	武正亨祐元祐熙	一二五八	五山版	桂堂瓊林の後記	天峰致祐の重刊後序	
正治緒熙承祿宝文応暦靖	28 17 4 4 2 6 15	一一〇三	版	批却集の末記		
6 44 38 7 42 応 5 3 11 3 14 8	五山版覆刻	一一七	西暦	高麗慶禪寺	高麗版	
一一一 九一 一七	一三九五 一三五七 一三二四 一三一七 一三〇三	一一八八 一一八八 一一九〇 一一九一 一一九一	暦	高麗慶禪寺 檜巖寺	高麗版	
一一一 九一 一七	一五二九 一五六四 一六七一 一六七五 一五六六	一一八八 一一八八 一一九〇 一一九一 一一九一	卷	高麗慶禪寺 檜巖寺 南北朝刊 南北朝初頃刊	高麗版	
六六六二 合合三二	六六三 二三三三二一	六六三 二三三三二一	冊	李稿の跋と刊記	川瀬氏『五山版の研究』	
東京、一喝社	大阪、小西氏藏版	朝鮮松広寺 嘉興府榜巖寺明藏本 京都、中野市右衛門	刊記	仁峯紫浮の増集序	『江戸時代書林出版書籍目録集成』	
刊記	刊記	刊記	刊記	刊記	『禅籍目録』	
駒大	駒大	駒大	駒大	駒大	東国大、東洋文庫（巻上、零本）、積翠軒旧蔵	
駒大	駒大	駒大	駒大	駒大	東洋、天理（二本、一は零本）、両足院、三井旧蔵	
禪学大系批判部	正統藏二一一八一五	仁峯紫浮の増集序	仁峯紫浮の増集序	仁峯紫浮の増集序	仁峯紫浮の増集序	
		長沙刻経処 京都、柳枝軒 京都、藏經書院				

〔筆写本〕

No.	筆写年	西暦	卷	冊	筆者	備考	所蔵者
f e d c b a							
室町末期	天文21	一五五二	三	一	不明		岸沢文庫
江戸初期頃	"	"	三	三	"		大東急
寛永14	(一五九四)	"	三	三	"(元和7~13) ³ 識語		茨城六地蔵寺
	一六三七	"	三	三	"		長野大安寺
	一	"	三	三	"		駒大〔三宗直指要訣〕
	梵永				" 内題「直指」		
					五山版の贋写		
					"		
					"		

い。古版禅籍の文献研究の上から、右の引文に注目されるのは、道元入宋のころ、『人天眼目』は禪門の初心者たちによつて、衣領にかくしもたれるほど、盛んに依用されていたことが知られる点である。時期的には、本書の成立後、約四〇年であり、それは、携帯に便利な小型の宋版テキストであつたにちがいない。

初版以後、いかに本書が江湖に流行したかについては、大陸・半島・本邦の三国にわたる夥しい刊行の歴史が、それをものがたる。本書の刊行本各種を整理し、年代順に表示したのが、△表1△の諸本一覧である。ちなみに、おもな古写本数点のリストも付載しておいた。

右のごとき多くの刊写本を、異本の系統によつて大別する

と、五山版・高麗版・明藏本、の三系統に分けられる。そして、これら三本の間における文章語句の相違たるや、数ある伝統的古禅籍中で、『六祖壇經』や『景德伝燈錄』等とともに、第一級の折紙をつけられるほどである。いうまでもなく、時代とともに意図的な改変や増減の手が加えられた禅籍ほど、それが常に生きて依用されてきたことの証左である。右の諸書が、こうした傾向にあるのは事実であり、その意味においては、『人天眼目』は道元の評価に反して、禪門では重要な古文献の一つに数えられるべきであろう。

筆者は、かつて本書のもつ文献上の性格と資料的重要性とに着目し、異本間の文献研究を行つたことがある。⁽³⁾ただし、最も古型を遺存するとみられる高麗版については、当時は唯

一本とされる東洋文庫所蔵の零本（巻上のみ）によつたため、その比較考察はきわめて不充分なものであった。ところが最近、韓国からの留学生で駒沢大学大学院に籍を置く鄭茂煥氏の労により、はからずもソウルの東国大学に所蔵される該書の高麗版の複写を入手することができた。貴重な古文献の閲覧のために払われた鄭氏のご好意といふ苦心とに對して、ハハに甚深なる謝意を表するしだいである。

東国大学所蔵の高麗版『人天眼目』については、一九八一年に同大学図書館から刊行された『古書目録』に、つぎのとく記載される。

人天眼目

智昭（宋）述 木版 太祖（1395）刊 三卷一冊 左右双边
半郭 19.5×13.1cm 有界 半葉一〇行 一〇字 上内向黑魚尾
29×17.7cm 線装
後序：至正十七年（1357）三月日松月閑人玉田誌
後誌：洪武乙亥（1395）十月……李穡（高麗）誌
紙質：楮紙

ところで、かつて大屋徳城氏が紹介された崔南善氏所蔵の『人天眼目』⁽⁴⁾一冊は、この東国大本とまったく同一版である。したがつて、あるいは東国大本は崔氏の旧蔵本そのものではないかと推定される。

筆者の手にする複写物件は、原本からの再複写本であるためか、惜しむらくは巻末に存するはずの李穡の後誌を欠く。

大屋氏によれば、崔氏本には李穡の文の次に、さらに王師大曹溪宗師禪教都總撰伝印心印弁智無礙扶宗樹教弘利普濟郡大禪師妙嚴尊者無學なる二行があるという。李穡は麗末の高官、無學は懶翁慧勤に嗣いだ禪德であるから、本版は第一級の著名人によって刊行された麗末の旧蔵本であった。

この高麗版には、物初大觀の後序につづき、左の五行が刻まれている。

荆岑玉泉住山鐘山慈薦廣鑄百拝
資徳大夫資正使姜公金剛卒衆重板留
京師高麗大聖寿慶禪寺
至正十七年丁酉三月 松月閑人玉回誌

第二行と第三行の意味は難解であるが、おそらく、本書は荊州玉泉寺の広鑄が刊行した宋版を至正一七年（一三五七）に高麗の寿慶寺で重刻した本が、洪武版の底本といふことであろう。じつは、「至正十七年……」の旧版刊記は巻上の巻末にも存する。したがつて、巻上だけを所蔵する東洋文庫本を、従来は至正一七年刊本とみたのは無理もないが、両者を比較すると、完全に同一版である。ここに、東洋文庫本も洪武二八年版と改めておきたい。旧積翠軒文庫本も同版である。

さて、高麗版禪籍は、宋元代の原本のままを伝承するのが通例である。複写物件であれ、原本の文字語句を知るために

は、なんら支障はない。いま、まのあたりに見る高麗版の内容分量は、さきの予想にたがわず、他本より著しく多い。のみならず、そこには豊富な新出資料がみられるのである。そこで以下、あらためて本書の内容を検討し、異本中の地位を把握し、若干の資料紹介をしたいと思う。

二 古版類の相違点

高麗版を考察する前提として、まず、代表的な異版相互の

△表2▽ 主要四種の構成内容対照

③五山版(一三〇三)	⑦高麗版(一三九五)	⑬明藏本(一五八六)	⑭流布本(一六五四)
1 重修人天眼目集綱領(目録)	2 晦巖の自序 淳熙15(一二八)	2 晦巖の自序	2 晦巖の自序
3 本文(不分巻)	3 本文	3 本文	3 本文
臨済宗・雲門宗 曹洞宗・鴻仰宗・法眼宗 宗門雜錄上下	卷上 臨済宗・雲門宗 卷中 曹洞宗・鴻仰宗・法眼宗 卷下 宗門雜錄	卷一～二 臨済宗・雲門宗 卷三 曹洞宗 卷四 鴻仰宗・法眼宗 卷五～六 宗門雜錄	卷次構成、明藏本に全同
4 物初の重修後序	4 物初の重修後序	4 物初の重修後序	4 物初の重修後序
5 桂堂の刊語	6 玉田の刊記 至正17(一三七)	6 玉田の刊記 丙戌(一五六)	10 致祐の重刊後序 延祐4(一三七)
7 李穡の誌 洪武28(一三九五)	9 楞嚴寺の刊記 丙戌(一五六)	11 竜潭考	12 楞嚴寺の刊記
8 無学の署名	13 阪府小西寺藏版の識語	13 阪府小西寺藏版の識語	

内容構成についてみておこう。それには、前記の古版類三種と、従来わが国で最も流布し、大正蔵経第四八巻所収の底本となつた承応三年(一六五四)刊本の、計四種をとりあげて、△表2▽で対照しておきたい。また、承応三年本の本文は明藏本と同一であるから、これを除いた古版三種の本文についての異同状況を③の五山版を基準として項目別に一覧し、△表3▽として掲げることにしたい。

△表3▽ 古版三種の異同対照（12等は細目順、□は記事の顯著な増、▽は同じく減、ab等は③における排列順）

③ 五山版（一三〇三）	⑦ 高麗版（一三九五）	⑬ 明藏本（一五六六）
1、臨濟宗 臨濟義玄の略伝 1四料揃 首山以下七名の著語 a ↗ g	著語の順序 a ↗ d ↗ c ↗ e ↗ g ↗ b ↗ f □湛堂頌	著語の順序 a ↗ d ↗ c ↗ f ↗ g ↗ e ↗ b 著語の順序 a ↗ d ↗ c ↗ f ↗ g ↗ e ↗ b
2三句 3三玄三要 4四喝 三名の頌の順序 a ↗ c	□南院の語 □古塔主の論 c ↗ a ↗ b	□南院の語 □古塔主の論 c ↗ a ↗ b
5賓主句 6四賓主 賓主問答の順序 a ↗ f	□南院の語と頌 b ↗ a ↗ c ↗ e ↗ d ↗ g (fナシ) □広教・首山・普明の各著語 □投子義青の頌（四首） a ↗ c ↗ b ↗ d ↗ e	同上
7四照用 四照問答の順序 a ↗ e 8興化驗人 9汾陽十智同真	△汾陽示衆語の後半なし 松源の十智問答を別出 汾陽四語問答の順序 c ↗ a (bナシ) □東林常総の語	同上
10汾陽四句 三名の著語 a ↗ c 11三種獅子 12汾陽三訣 13汾陽三句 14汾陽十八問 十八問の順序 a ↗ r	△同上 順序 c ↗ b ↗ a a ↗ n は同上、以下 n ↗ q ↗ p ↗ o l ↗ m ↗ n ↗ q ↗ r ↗ p ↗ o a ↗ g は同上、以下 g ↗ j ↗ k ↗ h ↗ i	△同上

- 15 浮山九帶
16 黃龍三閻
- 景福以下六名の頌の順序 a ~ f
- 17 南堂弁驗十門
18 臨濟門庭
19 要訣
20 古德綱宗頌

- 二、雲門宗
雲門文偃の略伝
- 1 三句
2 抽顧
3 一字閑
4 綱宗偈新統
5 機縁新統
- 6 巴陵三句
機縁三点
- 7 雲門門庭
- 8 要訣 文末に新統とあり

首文の語句、大異	同上(高麗版と完全一致)
□黃龍の自頌(第四首目)	同上
□廬山晃の語	同上
□b—a—d—e—c—f	同上
□海印信の頌(cとfの間に一首)	同上
□十門の一々に対する南堂の詳説(七紙半)	同上
▽簡略	同上
五名の著語が本項の末尾に配置	同上
▽末尾の一字閑一三字なし	同上
新統→新添	同上
新統→新添	同上
□機縁の典拠あり(伝灯・雪峯廣錄・廣錄)	同上
□頓庵・真淨・大慧・竹庵・宝華の各頌、計 一六首	同上
新統→新添	同上
□詳細(ほぼ景德伝灯錄の洞山章の伝に一致)	同上
□大陽玄頌(君臣五位の遂位頌)	同上

寂音正五位之訛新統

新統→新添。

□浮山遠頌（正偏五位の遂位頌）

新統→新添。

□同上

2 明安五位賓主
3 洞山功勲五位 遂位頌は末尾

遂位頌が本文と未分

□洞山の五位各々に對する語句

▽大陽頌なし（1に存するため）

□同上

□同上

□同上

5 石霜諸答五位王子
6 曹山三種墮

寂音説王種内紹外紹新統

新統→新添。

7 三種滲漏
8 洞山三路接人

新統→新添。

9 曹山三種綱要頌
10 明安三句 印信答三句は末尾

新統→新添。

11 曹山四禁語
12 門風偈 a 芙蓉楷頌 五首

新統→新添。

13 自得暉五転位頌
14 宏智四借頌

新統→新添。

15 曹洞門庭
16 要訣

新統→新添。

17 古德綱宗頌 二首

新統→新添。

18 宝鏡三昧

新統→新添。

□項目末尾の細注
□洞山三種綱要明安註（約四倍増）
印信答三句が琅琊覺答三句と未分

□項目末尾の割注
□古德頌 四首

□古德分三種功勲新增

□同上

□同上

□同上

鴻山靈祐の略伝

- 1 三種生
- 2 円相因起
- 3 弁第八識
- 4 仰山臨終付法偈
- 5 三然燈新統

- 6 香嚴三照語
- 7 鴻仰門庭
- 8 要訣
- 9 古德綱宗頌

五、法眼宗

法眼文益の略伝

- 1 華嚴六相義
- 2 法眼頌 七首
- 3 韶國師宗風頌
- 4 韶國師四料揃
- 5 法眼門庭
- 6 要訣
- 7 古德綱宗頌

百丈端頌を別出

▽簡 略

▽同 上 (高麗版に完全一致)

因記の後半語句、異同大

□後半の文、四〇〇余字

新統→新添。

□首文の割注

同 上

同 上

△新統→なし

同 上

▽簡 略

□詳細 (約四倍の増)

□華嚴六相義解 (一四〇余字)

この二項目の順序が逆

百丈端頌が未分

上下の分巻なし

▽語句簡略

新統→新添。

この項目なく、前項2と未分載録

新統→新添。

5 参同契 雪寶著語

6 五問

7 覚夢堂重校五家宗派序

七、宗門雜錄下

1 巖頭三句

2 汾陽五問句

3 肇論四不遷

4 巖頭四藏鋒 a 達觀頌 四首

b 古德頌 四首

5 宗門三印 三名の頌 a ~ c

6 三朝王子

7 南明慎獅子話

8 長蘆祖師福宝劍話

雪寶・慈明・翠巖の著語

9 智門祚蓮花話 三者の著語 a ~ c

10 風穴古鏡話

11 五祖演儻陀婆話

12 鏡清符問風穴六刮

13 五宗問答

14 円悟五家宗要

15 揚無為頌五宗 諸祖頌 a ~ r

□四智の各々に夾注
新添とあり、文字の異同二字
▽なし（後出）

□臨濟有四大式不出三玄統集
□臨濟有八大種行棒

□臨濟略有一十三句
▽なし（後出）

▽なし（後出）

不分卷

□三句を文頭に別出

同上 同上

未分載錄

頌の順序 a — c — b

同上 同上 同上 同上

同上 同上

天柱靜・翠巖芝・承天宗の著語
著語の順序 c — a — b

□三玄問答の語句
□四不到句意 古德
諸祖頌の順序 a ~ g、以下 i ~ h ~ j ~

▽諸祖頌一八首なし

k — l — n — m — p — o — q — r

□諸祖頌中、西天諸祖と趙州の二首

□首山綱宗偈

□十 規

問答の順序 d — e — f — a — b — c

同 上

▽なし

□答の語句

□無縫塔・無孔鎧の一問答

▽鼓山珪十無頌なし

□達磨真性偈

□五問（三紙半）

▽なし

□一喝分五教新增（一紙半）

□禪林方語新增（二紙半）

▽なし（前項中に既録）

□大愚芝和尚舉汾陽宗風歌（一紙半）

□覺無堂重校五家宗派序

□流芳正統図（二三紙）

16 三種法身 問答六 a ~ f
17 五 眼
18 三 宝
19 拄杖話 意
20 句 意
21 六祖問答
22 十無問答

達磨真性偈

23 五宗要括

三 古版三種の比較

右に表示した古版三種の異同対照によつて、五山版に対す

る高麗・明藏の二種における特徴を、よみとることができよう。すなわち、まず高麗版のテキストとしての特徴をあげる

(一) 五山版よりも分量が著しく多い。就中、他にみられぬ

独特的の項目や語句・偈頌を多く含んでいる。

(二) 五山版よりも語句の少い箇所は、ごく僅かにすぎない。

(三) 全体的に、項目順や項目中の語順、文章形式などに統

一がなく、雑然たる未整理の状態を呈している。

(四) 五山版の「新続」が「新添」となっている。

(五) 明藏本とは、より近接した関係にある。

一方、ここで基準とした五山版の特徴は、旧稿でも記述したごとく、テキスト的によく整理された善本、という一語につきる。すなわち、項目立て、項目中の語句・偈頌などの排列、文章形式などが、整然と合理的に編集されているからである。

他方、明藏本は、テキスト的には高麗版に近いが、「古德分三種功勲」「喝分五教」「禪林方語」という独特の三項目が「新增」として付される点が大きく異なる。また、物初大觀の後序をもたないことも、古型たることの証拠であろう。

ittai、本書の宋代における古型は、いかなるものであったのか。これをさぐるため、主要四種のテキストに付せら

れる序跋に注目しよう。さきの△表2△を参照されたい。

まず、すべての異版に付せられる淳熙一五年(一一八八)の撰述にかかる晦巖の自序中、本書の編集に関する記事をみよ

う。(句読点筆者、以下同)

有意於綱要、幾二十年矣。或見於遺編、或得於断碣、或聞尊宿称提、或獲老衲垂頌、凡是五宗綱要者、即筆而藏諸。雖成巨軸、第未暇詳定。晚抵天台萬年山寺、始償其志、編次類列、分為五宗、

名曰人天眼目。其辭皆一、依前輩所作、弗敢增損、然是集也。⁽⁵⁾乃從上諸大老利物施為、既非予胸奧之論、俾行於世。有何誚焉。

ここでもつとも重要な言は、晦巖編集の原本は、すべて典拠に忠実なナマの資料であったこと、および、この自序が本書の初刻の際に付せられたこと、の二点である。この初刻本が、たちまちにして江湖の初学者たちの喝を癒やした事実は、さきに引く道元の言によつても知られる。時あたかも、五山十刹を中心とする江南禪界は、空前の繁榮を謳歌する南宋の盛時であった。

ところが、流行が進み、伝写の度が重なると、本書はしだいに文字語句の誤りや増減を生じてきらし。初刻後七年の宝祐六年(一二五八)に、物初大觀が書いた重修後序は、その消息を次のようにいう。ちなみに、この後序は、五山版と高麗版の各巻末、および『物初贋語』卷一三、のみにみられる。

越山有昭晦巖者、袞類五宗機語之要、曰人天眼目、衲子到今伝抄。人有其書、徒珍藏如左券、魚魯之殊差之不理、而互有增損糅雜、独未知初出之本果何如也。余病其然、輟應酬之冗、蒐酌而是正之、稍得其所要。俾後進知從上宗門爪牙之為人、蓋如此。⁽⁶⁾

このように、写誤や増損糅雜の程度は、すでに晦巖の時の原初形態を不明ならしめるほどであった。問題は、写誤よりも増損糅雜にある。そこで物初は、応酬の冗長な語句を輟削蒐酌してこれを正し、所要をえた。後進にこれを知らしめたいとは、刊行流布を意味する辞である。つまり、物初の仕事は、何本かの異本を対校し校訂することにあった。「重修」の二字は、その事實をものがたる。

ところで、北磯居簡の法嗣である物初大觀（一一〇一～一二六八）は、大慧派四世の人である。一方、一般に浙翁如琰（一一五二～一二三五）の法嗣とされる晦巖智昭も、同じく大慧派四世に當る。しかるに、晦巖の自序（一一八八）から物初の重修後序（一二五八）までには、じつに七〇年の隔りがある。しかも、前掲のごとく、晦巖は本書を成すまでに約二〇年を要しているから、その蒐集の開始は一一六九年ごろのはずである。この時、浙翁はまだ一九歳にすぎない。したがって、両者の師資關係が事実であるとすれば、両者はほぼ同年齢であり、『人天眼目』の成立は晦巖の中年ごろでなければならぬことになろう。

いったい、晦巖は僧伝や系譜にはまったくみいだされぬ人である。これを浙翁の法嗣とするのは、おそらくは萬安英種（一五九一～一六五四）の『人天眼目鈔』の中に、
晦巖不見宗派中。或云、徑山浙翁如琰禪師ノ法嗣也。又云、大惠

派也。⁽⁷⁾

ある記載などによるのであろう。しかし、萬安の語も典拠不明であり、前述のごとき不自然な関係から、晦巖が大慧派の人であるにせよ、浙翁の嗣とするのは再考を要する。

次に、物初の重修本を承ける五山版の巻末におかれる、わが乾元二年（一三〇三）に桂堂瓊林が撰した刊語の全文に注目しよう。

是書之所由作者、備見於晦巖・物初兩翁序跋矣。雖然、趙宋全盛之時、南詢衲子伝写、而非無烏焉成馬之誤。爰有了部禪人、銳意克正、始自伝燈以下、至於五家宗派尊宿別錄、莫不傍羅曲探点對校讎、遂成真本。所謂、孟氏之功、不在禹下者乎。淨智禪人、希顏慕蘭、命工鏤板、以寿其傳。其用心亦可謂勤矣。學者儻思、所以扁曰人天眼目。則功不浪施耳。

乾元癸卯正月八日

桂堂 瓊林記⁽⁸⁾

桂堂は、入宋して徑山の虛舟普度に嗣いだ人であり、帰朝後、師の『虛舟和尚語錄』とともに本書を刊行した。⁽⁹⁾その際の刊語が右文であるが、宋朝における伝写の誤りを、了部禪人が『伝燈錄』等の文献と対校して真本となした、という。物初の名を掲げ、その後序をおくことから、この五山版は、物初の重修本を底本とした校訂本なることが知られる。ちなみに、本邦では中世を通じて、この五山版の影響は大きく、前掲の△表1▽における古写本類六種は、すべて五山版に基

づく謄写本であり、また、本書の中世抄物も、五山版に対する注解である。⁽¹⁰⁾

次に、承応版の巻末には、元の延祐四年（一三一七）に江西撫州天峯比丘致祐の撰した重刊後序がおかれている。承応版は明蔵本を底本としつつ、底本にないこの元版の序と、『永覺晚録』中の「龍潭考」を付録する点に、資料的な価値がある。ちなみに、これらの付録は、ともに天王道悟説の誤りを正す論辞である。序文中、重刊の理由と改訂について、左のごとくいう。

流布叢林、伝写既久、未免有烏焉亥豕之誤。其写本亦多不同、曰
彼曰此、互有得失。暇日参考同異、訛者正之、闕者削
之、猶慮未善。然其元本排列、五宗亦失師承次第、今改正之。初
列臨濟・鴻仰。蓋此二宗、同出南岳・馬祖下。次列曹洞・雲門・
法眼。蓋此三宗、同出青原・石頭。

文はさらに、近ごろ天王をたてて雲門・法眼の二宗を馬祖下とする愚説を笑い、その誤りを論証する。致祐については不詳であるが、おそらくは曹洞宗に属する人であろう。とまれば、現在は伝本の知られぬこの元版が、青原下の師承と排列を正すことを意図したことは明らかである。テキストとしては、物初以前の伝写本を再治重刊した一本とみられる。

以上、テキスト自体の特徴と、古い序跋の言辞をみた。そ

の結果、宋元代には何種もの伝本が存したが、今本の古版三種としては、物初の整理が施された宋版を承ける五山版よりも、高麗版・明蔵本に原本の面影をより多く遺存する理由が明らかにせられた。両者の新旧はつけ難いが、できるだけ多くの綱要を集めようとする姿勢は、高麗版をもって最高とする。巻末に物初の後序をおく理由は難解であるが、南宋末から元初にかけても、まだ増広していたことを示すのかもしれない。ともあれ、高麗版の全貌が知られることにより、明蔵本の内容的古さも立証されたわけであり、今日としては、ともに独自の資料の遺存をよろこぶべきであろう。

四 高麗版の独自資料

大正蔵経巻四七に収録される『人天眼目』は、承応三年刊本を底本とし、これを五山版で対校する。承応版は、明蔵本の覆刻である。したがって、正蔵本により、古版二種の原文は知られるわけである。

一方、高麗版のみに含まれる独自資料は、分量的には多いが、素直にいって玉石混淆の感をなしとしない。しかし、すくなくとも南宋期の古文献類であるから、今後の検討資料として識者の炯眼にゆだねるために、まとまつたもの一九点を翻刻して本稿の附録とする。以下、これら個々の資料について、要点のみを略説しておきたい。

まず、(1)の「湛堂頌」は、護国景元(一〇九四—一一四六)の法嗣、湛堂智深の作と思われるが、他に知られぬ新資料である。

(2)と(4)における南院の語と頌は、南院慧顥(*一九五二)の撰述に擬せられるが、これも南院の現存資料にはみいだされない。従来、南院には三句の説示があつたとされながら、その資料が知られず、また、『南院和尚語要』にみられる喝の使用と(4)の関係など、臨済の禪風拳揚者としての南院の研究にとつて、新たな資料となるものである。(3)の古塔主とは、雲門宗の薦福承古をさす。

(5)の四賓主に関する投子義青の頌として注目すべき作品であるが、『投子青禪師語録』中のものとは文字の異同が多い。

(6)は南堂が学人に公案透過のための綱要一〇門を示衆したもので、高麗版は、(一)誘引の語、(二)一〇門の名称、(三)一〇門一々の詳説、(四)結語、から成る。(二)(四)は他本にも存在するが、長文の(三)は高麗版独自の新資料である。ちなみに、南堂は五祖法演下の南堂元靜であると思われる。

(7)は頓庵愚の頌三首、真淨克文の頌九首、大慧宗杲の頌一首、竹庵士珪の頌二首、宝華普鑑の頌一首、計一六頌から成る。頓庵愚については不詳であるが、多分大慧派の人であろう。

(8)は仁宗の勅に対えて秦州大中寺道隆が撰述した序文で、

五位君臣に闡説する新資料。道隆については、『続伝燈錄』四に広慧元璉下の東京華嚴道隆が立伝され、仁宗の厚遇をえたことが知られるから、おそらくはこの人であろう。

(9)は「洞山三種綱要」に対する大陽警玄の註で、他本では「曹山三種綱要頌」として三頌を記載するのみに対し、高麗版にはその三頌一々に付した註がみられる。この註は、『禅林僧寶伝』一三の大陽伝に所載される「曹山三種語」への注⁽¹²⁾とは別文で、これも新出資料であろう。

(10)と(11)は宏智正覚の「四賓主頌」と「四身頌」という二頌であるが、『宏智廣錄』中にもみいだせぬ珍しい資料。

(12)は法眼文益の「華嚴六相義」に対する義解であるが、作者は不詳。

(13)～(15)は臨済の四大式・八種行棒・十三句と称する諸機関と、それら一々の例証文。「続集」とあつて撰者名もなく、南宋末期の増加部分とみられる珍資料である。

(16)は「首山綱宗偈」なる五言八句の偈頌と、これに対する汾陽の割注から成る。また、これに接続する(17)「十規」は、撰者不明の禪門訓誡条項であるが、南宋期における禪門の悪幣を知るべき資料となるもの。

(18)は大愚守芝(*一〇五六)が師の汾陽善昭の宗風を挙揚して詠じたとされる長文の歌頌。従来未知の作品であるが、

(16)とともに厳密な資料点検が必要であろう。

(19)は靈隱惠照大師可光の編述した「流芳正統圖」で、原本二三紙におよぶ高麗版中最長の資料である。從来まったく知られぬ禪門五家の系譜であり、南岳・青原以下の主要な祖師を臨濟・雲門・曹洞・法眼・鴻仰の順に配し、わかる範囲での名・諱・生縁・年齢・俗姓・謚号・法嗣数を表示形式で記載している。

編者の可光については、『人天眼目』に所収される「真性頌」の撰述者でもあるが、杭州靈隱寺の『靈隱寺志』(光緒一四年へ一八八八年刊)には記載なく、目下のところ不詳である。

ただし、「流芳正統圖」は臨濟宗の正系者の末尾に大慧派の教忠弥光をおくから、この派に属する人かと思われる。編述時期については、『臨濟派』の末尾に径山冲(痴絶道冲、一一六九~一二五〇)と径山月(心溪心月)をつらねるから、一二一五〇年以後の成立とみられる。

内容的には、雲門・法眼の二宗を馬祖一天王一徳山一雪峯の系譜下とし、天王道悟の立場を論述する。また、雲門・鴻仰二宗の記載に密で、曹洞宗は極端に疎であるなど、きわめて宗派臭の濃い偏向的な系譜といえる。

いったい、可光は天王道悟説の根拠として、『人天眼目』の各本に所収される覚夢堂の「重校五家宗派序」をあげるが、この序は、達觀曇顥(九八九~一〇六〇)撰『五家宗派』の重刊序文にほかならぬ。書名のみで知られる『五家宗派』が雲

門・法眼の二宗を馬祖⁽¹⁵⁾とする系譜を主張する」とは、『林間錄』によつて知られているが、可光の「正統圖」は、まさにこの書を承ける系譜である。本書は、この意味で貴重な資料といえる。その他、伝歴不明者の出身・年齢・俗姓などもままみられ、また、臨濟宗石霜下を楊岐・黃龍・翠岩の三派に分け、その門下の宗風を論述するなど、今後の宋代禪宗史研究に裨益する資料も存在する。

註

- (1) 岩波文庫『正法眼藏』中 p.300
- (2) 『洛城東山建仁寺開山始祖明庵西公禪師塔銘』(『続群書類從』二二五)
- (3) 「人天眼目」の諸本(『宗学研究』110)
- (4) 「高麗朝の旧弊」(『積翠先生華甲寿記念論纂』p.87~88)
- (5) T.47-300 a
- (6) T.47-334 b
- (7) 承応三年(一六五四)、京都中野市右衛門刊本
- (8) T.47-334 b~c
- (9) 川瀬一馬『五山版の研究』上 p.77
- (10) 中田祝夫編『人天眼目抄』付解題参照。
- (11) T.47-333 b
- (12) 柳田聖山「南院慧顥」(『禪學研究』50)を参照。
- (13) T.51-490 c~491 a
- (14) Z2Z-3-248 c~d
- (15) 宇井伯寿『第二禪宗史研究』p.58~459において、この問題の論証がなされている。

八附 錄▽

(1) 慈堂和尚頌 緗元布袋

奪人不奪境。翻身漢地遊、烏江空百戰、万里屬鴻溝。奪境不奪人。將軍猶渭城、雙鶻一箭落、李広不当名。人境兩俱奪。茫茫烈火焚、聖凡情盡処、寶劍列當門。人境俱不奪。

(2) 南院入興化室問、四料揀意如何。化云、奪境不奪人者、一切智境悉皆奪、之方能不奪人。無奪者、直須奪得人位、並奪四位喚作兩俱奪、凡聖二邊有無、悉皆滅盡也。

人境俱不奪者、凡即是凡、聖即是聖、方為之仏不奪。衆生願會教意、便明得祖意也。

夫恭學者、排此言句、隨順時機、擬議之間、此屬不了。更依聖解、求見妙會。當人境兩俱奪、一齊不留、尽令施設、終不中途而息。也如兩陣相戰、纔奪旗鼓、活捉生擒、或斬或剝、亦如曾殺親姻、不復容恕。況子孫兄弟、乃至鄰里、亦不留。若不如此、返遭其殃。

竹菴示衆云、臨濟道、一句中須具三玄、一玄中須具三要。大眾事因叮囑起、展転見諸訛。聽取一頌。

句中難透是三玄、一句該通空劫前、臨濟命根元不斷、一條紅線手中牽。

宗師一切語言中、皆具三玄三要、世出世間法悉皆具足。若不如是、謂之虛妄說法、亦云妄言綺語。故淨名呵云、無以生滅心行、說實相法、既無實見、必無實行。設爾修生、皆成邪見。若以此生滅心行、修道修不成道。仏云、以生滅心、有本修因、如証如來、無生滅果、終不可得。如蒸砂作飯。此三玄法門、唯悟道者、悉皆通徹。若未悟道、即得一玄、或得二玄。所以、各各見解不同。雖則見解不同、皆是正見也。

(4) 南院問興化、四喝意旨如何。化云、一喝如獅子哮吼、衆獸腦裂。明法身辺事。此是主用也。雨喝如霹靂之光明。向上辺事、賓家用也。三喝如雨瀉盆傾、草木皆潤。明法身向上事。

主家用也。四喝如白象失物、失之用。賓家用也。須会照用同時、照用不同時、先照後用、是終用、先用後照是始用。其四喝者、分作四賓主。主中主、將軍韓信亦不顧。主中賓、自由自在自受用。主中主、有始有終、方呈為主分明。有時有頭無尾、亦為主中主。如斯之見、未為端的。要知此事、大用現前、不存賓主、方名賓主也。頌曰、金針双鎖備、拳目即乖違、但看無分別、憑弄一堆灰。金距云、一喝点底語、一喝除過奇特、一喝討底句、一喝下一棒、分明出格道人。

(5) 投子青禪

(3) 古塔主論云、此三玄三要法門、是仏知見。諸仏以此道、者

茫受苦輪。

人亡家破土無遺、目前無物告他誰、且帰巖壁青蘿下、待得盲人說向伊。

九宮不恋入荒衢、弊漏殘衣甘自居、入水光時君不會、金烏沈處月輪孤。
千聖常囬不露顏、衆星攢處紫微寒、塔頭半座孤光現、七寶輪呈世外看。

(6) 南堂辨驗十門

一須信教外別伝

仏說一大藏教。臨涅槃日、於靈山會上、瞬青蓮目。唯有金色頭陀、被顏微笑。世尊云、吾有正法眼藏涅槃妙心、分付摩訶迦葉、吾當入大寂滅定。此經教外別伝、須是深信始得。有

回光不可論、靈鷲拳花明此意、祖庭立雪別無門。百川洶湧咸帰海、萬國歌謡捧至尊、和氣不迷王化力、誓同擊節報深恩。
二須知有教外別伝
大凡參學、知自己一靈真性、日用惺惺、見色聽聲、聞香知味、覺觸攀緣、手捉脚行、皆是自己一靈真性也。方能尋師找友、發大誓願、朝參暮請、廉明潔白、恬淡身心、事善知識。如仏無二師見其勤故、指示見處。故円覺經云、逢善知識、依彼所作、因地法行。若遇如來、無上菩提、正修行路、根無大小、皆成仏果。又心華發、明照十方刹、便離無作止任滅四病、是名知有教外別伝者矣。頌曰、利劍當空斬薄浮、隔牆見角便知牛、纖塵有障雲遮日、毫髮俱忘月映秋。殺活須教知去處、縱橫直要辨來由、目前縉素無多子、誰敢低頭捨取休。

三須會無情說法與有情說法無二

仏說、一切法只要令人見自己法身、本來面目、父母未生前自己。要識體用無情說法。經云、利說一切法、熾然說無間歇。又云、於一毫端、現寶王刹、於微塵裏、転大法輪。方見一合乾坤、是箇普光明殿、十方世界、是箇本來面目、方會即心即人身。万劫不復。須信有仏法僧。天堂地獄、餓鬼畜生、蠢動含靈、皆因不信。所以、輪廻六道、信是一靈真性、無生死、無古今、無男女相、無福德貧賤。自仏至天人一切物命、皆與仏性同一体。只緣迷悟有差、即处处生心。謂之衆生悟、即念念自省、心不顛倒、心不散亂、正念現前。是名見性成仏、超越生死、心即是仏、仏即是心。頌曰、勞生擾擾競朝昏、一念脫之門。方會、古人道、盡大地是箇解脱門、把手拽不肯入。

方會、無情說法與有情說法無二。頌曰、

龍吟虎嘯風号樹、入耳清音且不同、淡薄豈拘聲色外。虛閑寧墮有無中。頓忘機鑑超玄妙、作略情塵有變通、林下水邊時放逸、寒山何處不相逢。

四須見性如觀掌上了了分明一一田地穩密

謂他見處明白、把得定作得主、更無疑惑心地。謂之安樂法門、亦謂之歡喜地。永嘉云、一地具足、一切心地。朗然纖毫、澄淨為地。見得分曉、如觀掌果。了了分明、更無走作。離言語絕聲色、仏見法見。古人亦不令起念、何況非法。謂之一一田地穩密。頌曰、

百千妙義一毫端、了了分明作麼觀、兔角杖頭挑普化、龜毛拏上看豐千。閑將日月眉間掛、戲把乾坤掌上看、丹鳳不應離畔覓、笑看天際舞祥鸞。

五須具挾法眼

既曉前面四門、方會仏語天下祖師語。是空劫已前自己語、是鳥道玄路殺活自由、離言句絕聲色。方會有句無眼、無句有眼、只如丹霞見忠國師睡次、乃問侍者耽源曰、國師在麼。源云、在即在、只是不見客。霞云、太尊貴生。源云、莫道、上座仏眼也覩不見。霞云、龍生龍子、鳳生鳳兒。國師睡起、源拳似師。師打三十拄杖。霞聞云、不謬為國師。及霞來訪國師、乃進前兩步。師云、不是。霞退兩步。師云、是是。霞遶禪床一帀出去。師云、去聖時遙人多懈怠、似此伶俐漢也難得。霞又

問僧、甚處來。僧云、山下來。霞云、喫飯了未。僧云、喫飯了。霞云、將飯與你喫底人、還具眼麼。僧無語。保福云、施者受者二俱瞎漢。已上是有句無眼。霞又問使牛公子、覆船路向什麼處去。公子打牛一下。又問牧童。覆船路向什麼處去。童云、上是天下是地。霞云、忽遇天崩地陷時如何。童云、蒼天蒼天。霞云、非父不生其子。已上是無句有眼。五祖云、參禪須具挾法眼。僧便問、如何是挾法眼。祖云、破燈盞。僧云、畢竟如何。祖云、坦板坦板、一一見得、一一識得。見者箇因緣、謂之挾法眼。頌曰、大道千差与万差、橫揮項目決龍蛇、揭開一口分賓主、統攝三千辨正邪。獅子奮威須陷虎、金鰲破浪不吞蝦、明珠在握誰能會、會得依前眼裏花。

六須行鳥道玄路

洞山云、玄途履踐絕追尋。可謂、心月孤圓、照臨万象、萬機休罷、千聖不携。坐斷要津、不通凡聖。直下如林中獅子哮吼一声、百獸俱死。不見、僧問大隋劫火洞然公案。有一僧、上方丈問大隋、適來問話僧不肯、和尚答此話。隋云、只是此。僧不肯。堂中三百僧俱不肯。僧云、只是一僧。隋云、直得三千大千世界人不肯、老僧猶較些子。其僧後到投子拳前話。投子展坐具望蜀禮拝云、此是古仏、汝速往彼懺悔、若參老僧、無如是與汝說速去。僧回值師已遷化矣。五祖云、我四十年室中、拳狗子無仏性話、並無人下得転語。著哉苦哉、若是人会得前後段話、我為法王、於法自在、說一字禪、通得十字。千

字万字若不会、一場懾懼。曹洞真鳥道玄路、蓋石頭接藥山、兒孫如珠如玉、真實意絕、斯之謂也。頌曰、含融萬法入淵微、体用俱收何用帰、日暮天光連水碧、雨余山色漾雲衣。空中撮影非為妙、物外追蹤豈俊機、無力与君分白白、秋來只見鴈南飛。

七須文武兼濟

若会一喝分、賓主照用一時行、通身是手眼、尽大地是山僧一隻眼。会得鳥窠吹布毛、便見山河并大地全露法王身、如魯祖見僧來便面壁。鴻山云、我尋當向汝諸人道、向父母未生已前會取、猶自不會。長慶云、如人學射久久自中。保福云、中後如何。慶展開兩手云、闍黎莫不識痛癢麼。如達磨魯祖面壁、真寒為人也。經云、一句一偈、通達無量無邊、一法通而萬法通此。所謂文武兼濟也。頌曰、經緯兼行驗比宗、更於韜略妙難窮、恢張祖道垂洪範、安貼家邦顯大功、和氣喚回帰掌握、頑器機逗入陶鎔、而今四海狼烟息、万派滔滔尽向東。

八須大機大用

臨濟一喝、有照有用、有縱有奪、如探竿影草。凡見僧便喝辨、此僧有無眼有無聲色、如僧問趙州、久嚮趙州石橋、到来只見略行。州云、汝只見略行、且不見趙州石橋。僧便問、如何是趙州石橋。州云、度驢度馬。僧問南堂、藏天下於天下、乃堅拳云、作麼生。藏堂云、有處藏。僧云、如何藏。堂云、衫袖裏藏。鴻山問仰山、馬大師出八十四人善知識、誰得大機

大用。仰云、百丈得大機、黃蘖得大用。大凡問答、第一句先、第二句後。謂之大機大用也。頌曰、棒喝交馳絕正偏、針鋒頭上化三千、磨礪今古超情句、變態乾坤在目前。爍爍寒光珠媚水、寥寥雲散月行天、德山臨濟偷心鬼、也好牽來一串穿。

九須摧邪顯正

既是參學道眼明白、一法不存、如丹霞燒木仏、城東老母、不願見仏、世尊生下一手指天、一手指地云、天上天下唯我獨尊。雲門云、當時若見、一棒打殺、与狗子喫貴面、天下太平。又如僧問智門、如何是仏。門云、踏破草鞋赤脚走。又云、一大藏教是破草鞋、如斯之類、是謂摧邪顯正也。頌曰、扶危定亂破魔居、出格須還大丈夫、未入濠梁分勝負、直衝堂奧別賢愚。撩天鼻孔吼明月、着地眉毛撼太虛、歲晚歸來人不識、倚筇臨水看游魚。

十須向異類中行

如說禪說道、不見、盤山云、若言即心即仏、未入玄機。若言非心非仏、猶是指蹤之機。伝灯十策、第三策說心說性說仏說祖。第四至第十、悟入幽微、如雪子吟。如君解使雲通信石点头時、我不然、如料揀四賓主五位君臣、五家門庭大似平常。趙州勘婆子、百丈野狐、女子出定、如塗毒鼓。作善知識、拳一軛語、直饒牙如劍樹、口似血盆、聞者喪身失命。者箇因緣不涉擬議、解會卜度、參到大徹大悟。方知、不會入異類中行、不可作善知識。未得謂得、未証謂証、大妄語大脫空、墮

無間獄。經云、殺父殺母、仏前懺悔、誇大般若、不通懺悔。

北斗裏藏身

所以道、悟來千聖頭邊坐、用向三塗底下行。頌曰、黑山無路

勢崔嵬、一擊千門萬戶開、風散幽香淋巷陌、月移寒影浸樓台。

東涌西沒、北斗藏身、法王法令、德非有鄰。

倒携席帽穿雲去、翻着襯衫度水來、鬧市忽逢愁布袋、斂眉偷

眼笑盈腮。

有問啞啄機、雲門答云響、昨日雷轟天、夜來山水長。

吹毛劍

此十門、諸人還一一得、穩當也未。若只是閑門作活、獨了自身、不在此限。若要荷負、正宗紹隆、聖種須盡。此綱要十門、

方坐得、曲盡木床受得、天下人礼拜。可与仏祖為師。若不到

与麼田地、一向虛頭、它時異日、閻羅老子、未放你在有麼。

大家出來証拏。若無不用、久立。

不起一念、海裏須弥、把來便用、休別針錐。

禡月二十五

(7)頓庵愚頌
月照千江白、山高遠望青、誰人知此意、令我憶巴陵。

珊瑚枝枝撐着月、寶劍觀來成鈍鐵、払拭瑤琴徹曉彈、爭知弄巧番成拙。

葫蘆棚上挂冬瓜、仏手如何掩得他、秋至自然山有色、春來何處不開花。

真淨文頌
正法眼

但無一切心、自然合大道、應用在臨時、莫分妙不妙。
諸仏出身處

目前有路、誰解通方、東山水上、求者茫茫。

竹庵珪、頌雲門拈拄杖拳教云、凡夫實謂之有二乘析、
謂之無緣覺、謂之幻有、菩薩當體即空。

二乘菩薩何年尽、諸仏凡夫早晚休、世事但將公道斷、人情難似水長流。

宝華仏鑑慈頌

三句都將一弗穿、等閑掛在御樓前、幾多行客眼定動、東海鯉魚飛上天。

(8) 仁宗聖帝勅秦州大中寺道隆禪師述序云

夫耳目藏於胎殼宮商、玄象徒施半夜、亡於暗明。乃有君臣父子、離暗去暗、遂明隨明、明暗交馳、還同水乳、若顯無功之用、妙在体前、不仮虛玄、何人委悉。遂使泥牛哮吼、木馬嘶芍藥、經霜翠色、存紅爐猛焰、寒冰結。如斯玄妙、由乖真理之門、理事双明難免。回途之妙、因而立相、用顯其玄。故以序之。

(10) 宏智四寶主頌

(9) 洞山三種綱要 明安註

一敲唱双行

金針双鎖備 此是双明語句、勾鎖相連、血脈不斷、妙在体處。挾路隱全該 挾帶也真、是那畔人。須向露地已前妙會、始得其旨也。

宝印當空妙 宝印明王掌之、不落凡情之手。重重錦縫開 重重不開也錦者、文彩彰也開印、了開印、文彩未彰已前也。

交互明中暗 交光相應、明暗互用、各不相知。

功齊転覺難 功齊則坐、在一色辺事、轉功就位即難也。

力窮尋進步 力窮則是往来言、尽力窮勘、不失其玄旨。

金鎖網輓輓 金鎖則明進遠事句、鎖句句血脉勾連也。

三不墮凡聖又曰理事不涉

理事俱不涉 不涉者、則是聖凡不涉、迥出塵勞境界。

回照絕幽微 回照者、則是背功合體、万派帰源、即幽微之妙旨。

背風無巧拙 背風者、背生機生也。無巧拙者、得体用也。

電火爍難追 納子當機、能如電火。難追者則透此三種綱要也。

二金鎖玄路

稀犯聖顏。

(11)四身頌

真身 一葉落知天下秋、不風流処也風流、木人退步金繩斷、
直下無機牽鐵牛。

應身 双陸盤中信采贏、風行草偃月華清、攔街截巷惹布袋、
弥勒何時不下生。

門裏出身 無位真人赤肉團、大千沙界着毫端、明明不借他家
事、用處全功只箇般。

身裏出門 放曠還來荆棘林、倒騎牛自醉吟吟、誰嫌烟雨閑蓑
笠、只箇虛空不掛心。

(12)臨濟有八種行棒

一觸令返玄棒 如德山示衆云、今夜不答話、問話者三十棒。

有僧纔禮拜。山便打。乃罰棒也。

二接掃從正棒 如德山道、未踏船舷、合與三十棒。更待問
話便打。亦乃罰棒也。

三靠玄傷正棒 如大禪仏見仰山云、西天二十八祖如是、東
土六祖亦如居。和尚如是、某甲亦如是。仰
山便打。罰棒也。

四順宗旨棒 如主問僧答、應時主便打。乃是賞棒也。

五有虛實棒 如僧入門、師便打。僧有語。師亦打。弁真
偽也。

六盲枷瞎棒 如師自錯、即打學人。乃是瞎棒也。

七苦責棒 如雪峰拋簾、僧不認。便打。及是罰棒。

八掃除凡聖棒 如僧道得也打三十棒、道不得也打三十棒。
此乃方名正棒也。

(13)臨濟有四大式不出三玄 繼集

一正利大式 如達磨不語、少林面壁之類是。

(14)臨濟略有一十三句

有迷真之句 如百丈問鴻山与首座淨瓶話者是也。

二平常大式 如禾山解打鼓之類是。

三本分大式 通前二意同。此時山僧都不会。

四貢扳大式 如達磨答武帝不識之類是。

有出身之句 如問離四句絕百非。趙州道、老僧不与麼道。

有正宗老問句 如明覺云、上樹也請致一問來者是也。

有正宗老答句 如云說的十成、由是患驀直去。須自省玄旨。

有擬問傷玄句 如云貶上眉毛、早是蹉過了也。

有一放一收句 如無位真人、是什麼乾屎橛是。

有褒貶之句 如云不得春風花不開、花開又被風吹落是也。

有転身之句 如云來日大悲院裏有斎者是。

有把閂之句 如云道得也又下死、道不得也又下死者是。

有未後之句 如云鎮州出大蘿蔔是。

有隔身之句 如云無人處研額望者是。

有声前之句 如百丈喚黃蘖、近前來待打一掌是。

有悼脫之句 如云別日來向你道、是也。

(16) 首山綱宗偈

咄哉拙郎君。汾陽注曰、素潔天然。巧妙無人識。運機非面目。

打破鳳林闕。蕩尽玲瓏性。穿靴水上立。塵泥自異。

咄哉巧女兒。妙智理円融。擗梭不解織。无間功不立。

看他鬪雞人。傍觀容臙距、爭功不自傷。

水牛也不識。

全力能負、不露頭角。

(18) 大愚芝和尚舉汾陽宗風歌

先汾陽有十五家宗風歌、號曰廣智。其詞曰、大道不說有高低、真空那肯涉離微、大海吞流同增減、妙峯高聳摠擎持、万派千溪皆湧解、七金五嶽盡須弥、玉毫金色伝灯後、二三四七普聞知、信衣息広開機、諸方老宿任施為、識心是本從頭說、迷心逐物却生疑。芝曰、此叙宗旨也。或直指或巧施。解道前綱出後機、旨趣分明明似鏡、盲無慧目不能窺、明眼士見精微、不言勝負墜愚痴、物物會同流智水、門風逐便示宗枝、即心仏非心仏、歷世明明無別物、即此真心是我心、我心猶是機權出。

芝曰、此叙馬祖宗派也。或五位或三路施設、隨根巧回互、不觸当今是本宗、展手通玄無仏祖。芝曰、此叙洞上宗派也。或君臣或父子、量器方圓無彼此、士庶公侯一道平、愚智賢豪明漸次。芝曰、此叙石霜宗派也。有時敲有時唱、隨根問答談諦當、應接何曾失禮儀、淺解之流却生謗、或双明或單說、祇要當鋒利禪悅、開権不為鬪聰明、舒光只要弁賢哲、有圓相有默論、千里持來目視瞬、万般巧妙一圓空、爍迦羅眼通的信。芝曰、此叙鴻仰宗派也。或全提或全用、万象森羅寘不共、青山不碍白雲飛、隱隱當台透金鳳。芝曰、此叙石頭藥山宗派也。

五理事相違、不知触淨。六不經淘汰、抑斷古今言句。

七記持露布、臨時不解妙用。八不通教典、妄有引証。

九不問聲律、不達道理、好作歌頌。十護已忘短、多爭勝負。

(17) 十規

一自己心未明、妄為人師。二黨護宗風、不通議論。

三拳令提綱、不知血脉。四對答不知時、節兼無宗眼。

象骨鏡地藏月、玄沙崇寿照無缺、因公致問指歸源、旨趣來人明皎潔。芝曰、此叙雪峯地藏宗派也。或稱提或拈掇本色衲僧長擊癡句裏、明人事最精好手、還同楔出楔、或抬薦或垂手、切要心空易開口、不識先人出大悲、管燭之徒照街走。芝曰、此叙雲門宗派也。德山棒臨濟喝、獨出乾坤解橫抹、從頭誰管亂區分、多口阿師不能說、臨機縱臨機奪、迅速機鋒如電掣、乾坤祇在掌中持、竹木精靈腦劈裂、或賓主或料揀、大展禪宗弁正眼、三玄三要用當機、四句百非一齊鏟、勸同袍莫強會、少俊依前成窒碍、不知宗脈莫漫汗、永劫長沈生死海、難逢難遇又難聞、猛烈身心快通泰。芝曰、此叙德山臨濟宗派也。

19 流芳正統圖

臨濟宗

	名	諱	生緣	年	姓	謚	嗣
南嶽	德讓	金州	六十六	杜	大慧	九人	
馬祖	道一	漢州	八十一	馬	大寂	百三十九人	
百丈	懷海	福州	九十五	王	大智	三十人	
黃蘖	希運	福州	八十三	那	斷際	十三人	
臨濟	義玄	曹州	二十一人	慧照	廣濟	二人	
興化	存獎						
南院	道顥						

臨濟派

靈隱惠照大師 可光 述 首山念禪師下 南嶽下九世

谷隱	蘊聰	葉県	帰省	汾陽昭禪師下	南嶽下十世	賈

石霜	楚円	全州	首山	省念	杭州	七十八	劉
楊岐	方会	袁州	汾陽	善昭	菜州	六十八	狄
白雲	守端	衡州	太原	七十八	七十八	愈	一人
五祖	法演	綿州	五十四	冷	別出		
円悟	克勤	八十三	葛	四十八			
徑山	宗杲	鄧	李	冷			
教忠	彌光	福州	李	四十六			
彭州	七十二	七十五	十一人	一十一人			
		奚	二十四人	二十四人			
		大慧普覺	三十一人	三十一人			
		真覺	八十三人	八十三人			

金山	曇穎	錢塘	七十二	丘		八人
葉縣省禪師下						
浮山	法遠	鄭州	七十二	王		
瑯琊覺禪師下						
定慧	超信					
玉泉	務本					
大愚芝禪師下						
雲峯	文悅	南昌				
石霜永禪師下						
福嚴	寶宗					
浮山遠禪師下						
玉泉	謂芳					
金山顥禪師下						
普慈	崇珍					
瑞竹	仲和					
石霜円禪師下		南嶽下十一世				
黃龍	惠南	信州	六十八	章	普覺	一人
翠岩	可真	福州				
黃龍南禪師下		南嶽下十二世				
黃龍	祖心	南雄	七十六	鄃	寶覺	十六人
東林	常揔	劍州	六十七	施	昭覺	十六人
寶峯	克文	陝府	七十八	鄭	真淨	十九人
雲居	元祐					
大鴻	懷秀	信州				
黃蘖	惟勝	潼川				
開元	子琦	泉州				
清隱	清源	予章				
泐潭	洪英	邵武				
陳	鄧	許				
香城	順					
石霜之後	分為三派	曰	楊岐	黃龍	翠岩	九人
下門庭	分而為三	一味平實	別禁悟門	不立知見者	應	三人
如照	覺揔	開元琦	潛庵源是也	或以大千為一塵	王	三人
今為	一念者	如黃蘖勝	雲居祐是也	或照用同時	羅	一人
魔俱喪	奔流度刃	奪食驅耕	如真淨文	泐潭英	真覺	二人
城順	大鴻秀是也	如真淨文	泐潭英	香城		
法窟者	其惟晦堂心公乎	或問南曰	師門人何其多耶	順		
曰	狀元惟一耳					
黃龍晦堂心禪師下		南嶽十三世				
黃龍	惟新	韶州	七十二	黃		
黃龍	惟清	武寧				
泐潭	善清	南雄				
東林揔禪師下						
泐潭	應乾	袁州				
開先	行瑛	桂林				
毛	廣鑑					
七人						
九人						
四人						
二人						

石霜之後、分為三派。曰、楊岐、黃龍、翠岩。黃龍之下門庭、分而為三。一味平實、別禁悟門、不立知見者、如照覺揔、開元琦、潛庵源是也。或以大千為一塵、古今為一念者、如黃蘖勝、雲居祐是也。或照用同時、仏魔俱喪、奔流度刃、奪食驅耕、如真淨文、泐潭英、香城順、大鴻秀是也。見地諦當、宗說兼通、而窮尽今古法窟者、其惟晦堂心公乎。或問南曰、師門人何其多耶。曰、狀元惟一耳。

兜率	徒悅	贛州	四十八	熊真寂
法雲	杲	興元		
泐潭	文準			
清涼	惠洪	瑞州		
黃龍新禪師下		南嶽十四世		
禾山	慧方			
上封	祖秀	常德		
黃龍清禪師下				
上封	本才	福州		
長靈	守卓	泉州		
泐潭清禪師下				
黃龍	道震	金陵		
萬年	法一	開封	七十五	何
雪峯	慧空	福州		
泐潭乾禪師下				
勝因	咸靜	楚州	七十一	
雪峯	有需			
開先瑛禪師下				
慈氏	瑞先	紹興		
兜率悅禪師下				
跋山	了常			

三人
二人
三人
一人

兜率	慧照	南安
法雲	杲禪師下	
洞山	辯	
泐潭	準禪師下	
雲岩	天游典牛	成都
徑山	智策塗毒	天台
五祖	演禪師下	南嶽十四世
太平	惠勣	舒州
龍門	清遠	臨邛
開福	道寧	歙溪
大隨	元靜	閩州
円悟	勤禪師下	南嶽十五世
虎丘	紹隆	
育王	端裕	和州
大湧	法泰	漢州
護國	景元	永嘉
靈隱	惠遠	眉州
華藏	安民	嘉定
太平	勸禪師下	
文殊	心道	眉州
南華	知昺	永康

郭
鄭
十人
十三人
一人
一人
十三人
九人
十人
九人
一人

徐
朱
彭
張
李
錢
大悟

二人
二人
五人
四人
四人
四人
四人

龍牙	智才	舒州
龍門遠禪師下		
龍翔	士珪	成都
雲居		
烏巨	道行	洋州
黃龍	法忠	
開福寧禪師下		
大鴻	善果	
大隨靜禪師下		
石頭	自回	台州
護勝	居靜	
徑山杲禪師下		
東林	道顏	漳川
西禪	鼎需	
東禪	思岳	福州
西禪	守淨	
開善	道謙	
育王	德先	
華藏	宗演	
天童	淨全	
玉泉	曇懿	
玉泉	晦	越州
雲居		
德昇		
漢州		
雲居悟禪師下		
許		
李		
慈辨		
鮮于氏		
南嶽十六世		
王		
余		
姚		
葉		
李		
史		
施		

□ 一人 一人 一人 一人 四人 四人 一人 八人 一人 三人 四人 二人

玉泉	成
虎丘隆禪師下	
天童曇華	斬州
育王裕禪師下	
清涼坦	
淨慈師一	
大鴻泰禪師下	
蓬州	
靈岩仲安	
慧通清旦	
護國元禪師下	
國清行機	台州
焦山師体	
華藏智深	
靈隱遠禪師下	
東山齊已	天台
華藏民禪師下	
文殊道禪師下	
徑山寶印	武林
楚安慧方	
龍翔珪禪師下	
漢州	
雲居	
德昇	

何 許 李 謝 羅 楊 嚴 馬 江

慈辨

三人

雙林	德用	婺州	育王光禪師下	徑山琰淵翁	台州
万年	道閑		烏巨行禪師下	淨慈	居簡
					蜀中
薦福	休		黃龍忠禪師下	天童華禪師下	南嶽十八世
龜峰	慧光		信相 戒修	天童 咸傑	福州
大鴻果禪師下			大鴻果禪師下	天童傑禪師下	南嶽十九世
五泉	宗璉	台州	石頭回禪師下	資福祖先破庵	廣安
雲居	德會	重慶	教忠光禪師下	薦福	道生
法石	慧空	贛州	淨慈 曇密	徑山琰禪師下	南劍
東林顏禪師下			天台	徑山広聞偃溪	閩
公安	祖珠	南平		靈隱岳禪師下	南岳二十世
鼓山	安來	福州		雲居開掩室	
西禪岳禪師下					
鼓山	宗逮				
西禪淨禪師下					
乾元	宗穎				

董 蔡 何 廬

育王光禪師下	徑山琰淵翁	台州	天童華禪師下	南嶽十八世	鄭
淨慈	居簡	蜀中	天童 咸傑	福州	
			天童傑禪師下	南嶽十九世	
資福祖先破庵	廣安		資福祖先破庵	廣安	
薦福	道生		薦福	道生	
徑山琰禪師下			徑山琰禪師下		
徑山広聞偃溪	閩		靈隱岳禪師下		
靈隱岳禪師下			南岳二十世		
雲居開掩室					
天童	文礼	天目			
資福先禪師下					
徑山範無準					
靈隱薰石田					
薦福生禪師下					
徑山冲寂絕					
雲居開禪師下					
徑山月石溪					
蜀中					

吳

雲門宗

名 謹 生縁 年 姓 謚

双泉 師寬 洞山 守初

雙泉 郁 薦福 承古

西州 白雲祥禪師下

韶州 大歷和尚

德山密禪師下

文殊 応真

五十六人

六十一人

一人

二十一人

七十八人

七十四人

一百九十四人

四十九人

雪峰 義存 泉川 八十七

智門 澄遠 成都 曾真覺

香林 文偃 嘉興 張弘覺

雪竇 重顯 遂寧 李

天衣 義懷 常州 八十

惠林 法雲 宗本 領州

淨慈 楚明 善本 常州

淨慈 象

雲門派

白雲 子祥

德山 緣密

巴陵 顥鑑

雲門偃禪師下

二人 七人

十一人

明教

十人

二人

一人

一人

一人

一人

十三人

二人

五人

四人

十一人

洞山初禪師下
双泉寬禪師下
五祖 師戒
福嚴 良雅
双泉郁禪師下
德山 惠遠
薦福古禪師下
淨戒 守密
文殊真禪師下
洞山 晓聰
五祖戒禪師下
泐潭 懷澄

雙泉 師寬 洞山 守初

西州 白雲祥禪師下

韶州 大歷和尚

德山密禪師下

文殊 応真

五十六人

六十一人

一人

二十一人

七十八人

七十四人

一百九十四人

四十九人

雪峰 義存 泉川 八十七

智門 澄遠 成都 曾真覺

香林 文偃 嘉興 張弘覺

雪竇 重顯 遂寧 李

天衣 義懷 常州 八十

惠林 法雲 宗本 領州

淨慈 楚明 善本 常州

淨慈 象

雲門派

白雲 子祥

德山 緣密

巴陵 顥鑑

雲門偃禪師下

二人 七人

十一人

洞山	自宝	一人	廣因	抯要
北塔	思広	一人	開先	暹禪師下
福嚴雅禪師下			雲居	了元
北禪	智賢	三人	智海	本逸
德山遠禪師下			天章	元楚
開先	善運	三人	雲居舜禪師下	
禾山	楚材	一人	蔣山	法泉
洞山聰禪師下			天童	澹交
雲居	曉舜	二人	大鴻宥禪師下	
大鴻	懷宥	四人	育王璉禪師下	
仏日	契嵩	二人	帰宗	慧通
泐潭澄禪師下			仏日	戒弼
育王	懷璉	一人	天宮	慎徽
靈隱	雲知	一人	靈隱	知禪師下
九峯	鑑韶	一人	九峯韶禪師下	
洞山寶禪師下			大梅	法英
洞山	清辯	五人	玉泉皓禪師下	
北塔廣禪師下			天衣懷禪師下	
玉泉	承皓	一人	興教	文慶
北禪賢禪師下			惠林	若冲
法昌	倚遇	八十一	法雲	法秀
興化	紹銑	王	辛	円通
法昌	承皓	八十一	張	
高麗版『人天眼目』とその資料（椎名）				

長芦 応夫 滁州	蔣 広照
仏日 智才 台州	
天鉢 重元 青州	
棲賢 智迂	
雲居元禪師下	
百丈 淨悟	
善權 慧泰	
智海逸禪師下	
黃蘗 志因	
大中 德隆	
蔣山泉禪師下	
清獻趙抃居士 衢州	
慧林本禪師下	
金山 善寧	
資寿 巖	
本覺 守一 江陰	
投子 僧顥	
法雲秀禪師下	
法雲 惟白	
保寧 子英	
開先 智詢	
慧林沖禪師下	

省

仏國

三人	一人	三人	三人
長芦夫禪師下	永泰 智航	壽聖 子邦	
雪鑾 道榮			
長芦 宗頤	明州		
恵日 智覺			
夾山 自齡			
天鉢元禪師下			
元豐 清滿			
定慧 法本			
棲賢迂禪師下			
崇福 燈			
法雲本禪師下			
長芦 道和			
雪峯 思慧			
金山寧禪師下			
普濟 子淳			
本覺一禪師下			
越峯 純珪			
投子顯禪師下			
資寿 灌			

林

余 潘

田 周

孫 陳

三人 三人

二人

一人

崇寿 江

法雲白禪師下

智者 紹先

福聖 仲易

保寧英禪師下

廣福 惟尚

雪贊 法寧

開先珣禪師下

開先 宗

開先宗禪師下

岳麓 海

岳麓海禪師下

玉泉 思達

曹洞宗 六祖下

名 諱 生緣 年 姓 謐

青原 行思 吉州 劉 宏濟 一人

石頭 希遷 端州 陳 無際 十二人

石頭別出江陵城東天皇寺道悟禪師。婺州東陽張氏。悟
下得惠真、真得幽閑、閑得文貴、便絕。旧依伝灯誤、
修作得龍潭信、蓋龍潭信、乃馬祖下天王悟法嗣。今從

考證□於覺夢堂重校五家宗派序。

葉山	惟儼	絳州	七人	王弘道	韓愈	無住	一人
雲岩	曇晟	建昌	十九人	元證	悟本	不嗣而	十四人
洞山	良价	会稽	十九人	弘覺	王無住		
曹山	駢章	泉州	十九人	元證	悟本		
雲居	道膺	幽州	十九人	弘覺	王無住		
同安	志丕			弘覺	王無住		
梁山	緣觀			弘覺	王無住		
大陽	警玄	江夏	九人	弘覺	王無住		
投子	義青	青社	五人	弘覺	王無住		
芙蓉	道楷	沂州	四人	弘覺	王無住		
丹霞	子淳	劍州	三人	弘覺	王無住		
徑山	清了	綿州	三人	弘覺	王無住		
丹霞	宗珏			弘覺	王無住		
天童	智鑑	滁州	七十六	弘覺	王無住		
天童	正覺	隰州	六十七	弘覺	王無住		
治平	慶預			弘覺	王無住		
大洪				弘覺	王無住		
丹霞淳禪師下				弘覺	王無住		
天童覺禪師下				弘覺	王無住		
雪贊				弘覺	王無住		
瑞岩法恭石窓				弘覺	王無住		
奉化				弘覺	王無住		
林 陳				弘覺	王無住		
八人	吳	李	九人	弘覺	王無住		
八人	雍	賈	八人	弘覺	王無住		
八人	崔	李	七人	弘覺	王無住		
八人	張			弘覺	王無住		
五人				弘覺	王無住		
五人				弘覺	王無住		
五人				弘覺	王無住		
四人				弘覺	王無住		
四人				弘覺	王無住		
三人				弘覺	王無住		
三人				弘覺	王無住		
二人				弘覺	王無住		
二人				弘覺	王無住		
一人				弘覺	王無住		
一人				弘覺	王無住		

大洪預禪師下

惠力 悟

鴻仰宗

名 謹 生縁 年 姓 謂

南嶽 濩山 靈祐 福州 八十三 趙百文
仰山 慧寂 韶州 七十七 葉大円
南塔 光涌 南塔 惠清 芭蕉 繼徹

嗣

南塔涌禪師下
資福如寶

四十六人
十人
四人
十人

黃連義初
清化全憲
惠林鴻究

資福貞邃

鴻仰派

鴻山祐禪師下

香嚴 智閑 青州
徑山 洪諲 吳興

龍燈 法濟

一人 九人

一人

朱

西塔 光穆
霍山 景通
無着 文喜 嘉禾
五觀 順支

仰山 東塔和尚

香嚴閑禪師下

吉州 止觀和尚
壽州 紹宗

徑山諚禪師下
洪州 米嶺和尚

西塔穆禪師下
資福如寶

法眼宗

名 謹 生縁 年 姓 謐

南岳 馬祖

玄沙 師備

福州

雪峯

謝

李

魯

陳

王

智覺

嗣

南台安禪師下
鷺嶺 善美

十三人

一人

四十三人

三十二人

一人

法眼派

羅漢琛禪師下

龍濟 紹修

清溪 洪進

清涼 休復

南台 守安

天台韶國師下

玉泉 義隆

龍濟修禪師下

河東 広原

清溪進禪師下

天平 徒漪

円通 緣德

清涼復禪師下

奉先 慧同

魏府

張

*上記の資料一九点を翻刻するに際しては、左記の凡例に従つた。

- (一) 資料の見出し語、または首文をゴシック体で表記し、全体に通しナンバーを付した。
- (二) 文の体裁は、できるだけ原文の形を尊重した。
- (三) 全体に句読点を付した。